

泉鏡花「夜叉ヶ池」を読む

—いへの表象を視座として

お茶の水女子大学 院生 羅小如

鏡花が「愛と婚姻」（明治二十八年「太陽」）で、「社会」のための婚姻制度に対して猛烈に批判していたことは周知である。婚姻そのものに疑問を投げかける鏡花は「愛と婚姻」を通して、婚姻は「国、親、家、朋友、親属」に対する義務や責任、または孝道などいわゆる「社会」のための産物であると規定し、本当の愛を束縛するものだとは論を展開し、「自由なる愛」を唱えていた。そして、鏡花のこのような姿勢は観念小説を筆頭に、さまざまな作品に深く投影されている。大正二年に発表された鏡花の代表的な「幻想劇」とされている戯曲「夜叉ヶ池」もその一つに当てはまる。

「夜叉ヶ池」では、華族の子弟である萩原晃は家も親族も一切を捨てて、村の孤児百合のために鐘撞夫となり、琴弾谷に留まっている。そのような二人は仲睦まじい夫婦として描かれている。一方、「夜叉ヶ池」研究は鏡花の戯曲創作の濫觴と目される「沈鐘」との受容関係や、前「天守物語」的な位置づけから出発し、その幻想性や、超自然的な存在との関わり、または神話的な構造の解明などに、今までの考察の焦点が置かれている。しかしながら、鏡花の婚姻制度への極度の反感、また「華族」といった身分と当時の婚姻関係の実態などを合わせて考えてみると、晃と百合の夫婦像は極めて異色なものであり、そのまま看過されるべきものではない。

上記のことを踏まえながら本発表では、鏡花自身の「婚姻観」と大正初年の結婚事情及び家族の成立をめぐる諸問題を視座に据えたい。晃と百合の夫婦像に着目し、当時の社会的背景がどのように「夜叉ヶ池」における幻想的な世界観を構築する土台になり得るのか、ということに焦点を絞り、考察を試みる。